

屋良健一郎

（平成二十八年九月号）

ネギひとつ握りてレジに並びいる遠き女よ 妻というもの

心臓が魚のように跳ねている母乳を飲みて止まぬしゃっくり

しゃっくりをしつつ眠りに入らんとする吾子はときおり白雲を吐く

父よりも太く大きく育ちゆけ、やんばるの男の子ぞ、健太郎

ゆるぎなく日本人なれば「朝」の字を持たぬ健一郎健太郎

傘のような系図の露先 四百年続きし通字を持たぬ我が名よ

力強く右手を挙ぐる吾子かなし 県民大会行わるる午後



●作者の言葉

二〇一三年に出身地である
沖繩の大学に就職、十一年間
暮らした東京を離れた。それ
以来、寡作になった。就職し

たてで忙しいというのもある
のだけど、作歌の場の変化が
大きい。これまでの私は、雑
踏の中とか、終電の中で窓の
向こうの景色を見ながら歌を

作っていた。実体験ではない、雑踏の中に
いるはずの仮想の「君」への相聞歌を詠ん
でいた。それが今、車を運転し、サトウキ
ビ畑を前にする日々。そして、妻と子がい
る。その今をどう詠もうか。そう思ってい
る時の選者賞、とても励みになります。

●選者の言葉

今年の年間選者賞の候補は幾人もいた。
それだけ良い作品があつて嬉しいことだっ
たが、いざ一人を選ぶとかなり迷つ
た。最終的には昨年九月号の屋良健一郎氏
の七首を選んだ。特選に二回選んだ有力な
候補者もいたのだが。

屋良氏の一首目は「妻」の登場する作。
四句で一マスあけての「妻というもの」の
おかしみ。赤子を歌った二首目の比喻を使つ
た上の句も読者を微笑させる。もつとも父
親である作者は心配しながら見守っている
のだ。三首目は結句がユニーク。四首目は
幸綱氏が「今月の15首」で「記念の短歌と
して、大切な一首になるだろう」と述べた
作。五首目、六首目、「通字」を持たない
ことをテーマとしている重たい作である。